

国鉄ゼネストへの突破口ひらいたスト

現場には怒りと力があるんだ 指導部の屈服・裏切りこそが問題だ



85. 12. 14

No. 2117

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六（公衆）〇四七二二二七二〇七

十一・二八～二九ストの勝利の第一は、十万人の首切りを許すのか否かをめぐり国論を二分する大論戦をまきおこしたことだ。そして第二は、国鉄労働者のゼネスト決起への突破口を切り拓いたことだ。今全国で指導部の屈服・無方針のなかでうずまいていた不安と怒りが堰を切ったようにあふれだし「闘う方針」を求め、巨大な流動化が起っている。

一万の機動隊、九百の公安・白腕の重包囲うち破ってストを貫徹

中曽根や杉浦が、たかだか一一〇〇名の動労千葉の闘いに、全国動員の機動隊一万、全国からかき集めた公安官五百、首都圏から白腕数百を配置したのは何故か。それは、労働者の怒りのストライキ決起が全国に波及するのを恐れたからだ。

だからこそ敵は、津田沼・千葉運転区の両拠点合わせて二百数十名に対し、数十倍する権力を張りつけ、労働者を威圧し、動労「本部」や国労までまきこんだ大量のスト破りで列車を動かし、これを全国に見せつけることで国鉄労働者に敗北感と屈辱感を与え、二度とストなどやらせないことに全てをかけたのだ。

しかし、われわれは、こうした大反動をはねとばし、電車を止め、一人の脱落者もなくストライキを貫徹した。

「ストライキで起つべきだ」

が全国鉄労働者の声——指導部の姿勢・方針こそが問われている

そして、決定的なことは、この大重圧の下で、なおかつ国労の労働者が、中央からの指令で「当局の業務命令には従えスト破り電車を運転せよ」と強要されたことに断固として抗議し、スト破り方針を拒否するために動労千葉に加入・結集してストを共に闘いぬいたことである。

この現場国労組合員の真に労働者的な英雄的決起と奮闘にはげまされた国労津田沼電車区分会の組合員は「スト破り第

一日目」の仕業が終了したあと涙を流して分会・地本・中央本部指導部を糾弾し、夜を徹する激烈な討論を経て、中央本部派遣中執立ち会いのもとで、ついに、「十一月二九日スト第二日目の始業からのスト破り乗務は拒否する」という決定がかちとられるというすばらしい決起がかちとられたのである。

まさに、これこそ、ストライキの力であり、労働者の怒りのすさまじさを示すものであり、国鉄労働者が「闘う方針」を心底求めている何よりの証左である。これは決して、千葉だけのものではない。今、全国で「起つて闘おう」との声がわき起っている。

ゼネスト実現へ—— 第二波・第三波を闘いぬく

「雇安定協約」問題で明らかかなように、国労中央がいかに屈服を重ねようが当局は認めないのだ。われわれと当局の間は、倒すか倒されるか以外のいかなる関係もない。われわれが一步さがれば敵は十歩も百歩もつけこみ、攻めこんでくるといふ情勢なのだ。

国労中央の「三ない運動」の中止決定に対し、二七地本中、二二の地本が反対している。当然のことだ。

われわれのストは、この闘う労働者の怒りと結合し闘いぬかれ、勝利した。つくり出された流動化をもつともつと巨大なものとし、ゼネスト決起を実現するため、第二波・第三波のストで闘いぬこう。